

地域とともに歩む学校づくり

学校は地域に開かれるとともに、保護者や地域住民に信頼される学校運営をする必要があります。本市においては、平成16年度より、すべての市立学校で学校評議員制度を導入し、校長は評議員の意見を参考にしながら学校運営を実施してきました。現在、幼稚園においては学校評議員を、市立小・中・高等学校においてはコミュニティ・スクールとして学校運営協議会をそれぞれ設置し、地域とともに学校運営について考え歩む取組を進めています。

学校評価に関しては、平成19年6月の学校教育法、同年10月の学校教育法施行規則の改正により、自己評価・学校関係者評価の実施・公表、評価結果の設置者への報告に関する規定が設けられています。このことを受けて、各学校園では、教育活動や学校運営の状況について評価を行い、ホームページなどを通じて、評価結果の公表をするとともに、明らかとなった課題についての改善を図っています。

ここに、令和3年度の各学校園における「学校評議員の活用」や「学校評価の実施」の様子を「地域とともに歩む学校づくり」としてまとめました。各学校園では、この報告書を参考にするとともに、学校園・家庭・地域が連携・協力しながら、よりよい学校運営に向けて取組を実施し、開かれた学校、地域から信頼される学校となるよう努めてまいります。

令和4年7月
奈良市教育委員会

内容

1 学校評議員制度の活用（幼稚園のみ）

【学校評議員 役職の内訳】	2
【園長が学校評議員に求めた意見例】 〔意見を求めた園数の割合〕	2
【学校評議員からの意見を教職員全体で共有する仕組み】	3
【学校評議員の方々からのご意見が教育活動に生かされた例】	3

2 学校評価の実施

【学校評価を進める仕組みの有無】	4
【評価結果に基づく改善方策の検討を行う体制】	4
【外部アンケート（児童生徒・保護者等を対象としたアンケート）の実施割合】	4
【各校が設定した重点的な目標（評価項目）】	5
【学校関係者評価の実施について】	6

3 学校評価の成果と課題

【学校評価を行ったことで得られた成果】	7
【学校評価を進める上での課題】	8
【学校評価結果から指摘できる、学校園が抱える学校園経営上の課題】	9
【学校評価結果から指摘できる、学校園が抱える学校園経営上の課題の具体的解決策の例】	10

4 学校評価と学校ビジョン

【学校評価結果をうけて、改善しようとしている学校ビジョンの内容】	11
--	----

1 学校評議員制度の活用（幼稚園のみ）

【学校評議員 役職の内訳】

役職の内訳	人数	備考
P T A 関係	19人	それぞれの項目は元経験者も含む。
民生関係	12人	主任児童委員、児童委員
自治会関係	6人	
学校支援	1人	地域教育協議会、地域ボランティア
少年指導協議会関係	3人	人権教育協議会、安全推進協議会など
教職経験者	1人	
地域活動関係	6人	
社会福祉協議会関係	3人	
公民館・施設長関係	0人	
各種協議会	1人	
合計	52人	

※小・中・高等学校では、学校評議員に代わって学校運営協議会を設置しています。

【園長が学校評議員に求めた意見例】【意見を求めた園数の割合】

「地域の連携・協力に関すること」

〔全体 100%〕

- ◆コロナ禍での地域との連携の在り方について
- ◆行事等、園運営への関わりについて
- ◆地域や学校との連携の仕方について
- ◆地域の方の定期的な草刈りについて

「園に対する評価に関すること」

〔全体 93%〕

- ◆園経営・園運営の評価について
- ◆保護者の園アンケート結果の報告について
- ◆複式学級のよさについて

「幼児の安全に関すること」

〔全体 93%〕

- ◆新型コロナウイルス感染症対策について
- ◆災害時の安全管理について
- ◆登降園の安全について
- ◆防災対策、防犯対策について

「園の目標としていることに関すること」

〔全体 93%〕

- ◆めざす子ども像・教育ビジョンについて
- ◆園目標と地域で決める学校予算について
- ◆本年度の園ビジョンへの意見について
- ◆教育目標や園ビジョンについての理解について

以下、「教育課程・教育内容に関すること」〔全体:80%〕、「学校施設・設備に関すること」〔全体:60%〕、「生徒指導に関すること」〔全体:27%〕と続いています。

【学校評議員からの意見を教職員全体で共有する仕組み】

教職員全体で共有する仕組み	H26年度	H27年度	H28年度	H29年度	H30年度	R1年度	R2年度	R3年度
共有し、対応するシステムがあり、全体及び担当分掌で対応することができている。	52%	57%	74%	73%	65%	59%	85%	93%
共有し、対応するシステムがあるが、十分機能しているとはいえない。あるいは共有できていない。	45%	36%	25%	27%	35%	41%	15%	7%

【学校評議員の方々からのご意見が教育活動に生かされた例】

- ◆今まで行ったことのない場所を探検コースに加えた。
- ◆園内の環境を生かした保育、特に畑の栽培での食育活動をより一層充実させた。
- ◆園独自で行う預かり保育「見守り保育」を継続した。
- ◆地域の会議等の機会を見つけて、園児募集や幼小連携、預かり保育実施などの情報発信を行った。
- ◆ホームページを随時更新し、園の取組や子どもの様子をわかりやすく伝える工夫をした。
- ◆1人1人の保護者と子どもの姿や悩み等について話す機会をもった。
- ◆園庭開放を行い、子どもたちの遊んでいる様子を見たり、一緒に遊んだりしていただく機会を作った。
- ◆保護者の意識を高めるために、親子交通安全教室や引渡し訓練を実施した。
- ◆小学校と隣接しているため、通学時の危険箇所を確認するなど、親子での徒歩通園を呼びかけた。
- ◆園内の清掃や栽培などの活動をボランティアさんに協力依頼している。
- ◆今までの活動を見直し、ゲストティーチャーをむかえ、栽培活動などを取り入れた。
- ◆コーディネーターの方と一緒に教育活動の企画立案を行った。

各学校園で行われた学校評価をいかに年度末総括に反映させ、次年度の学校園づくりにつなげるかが、さらなる教育改善のポイントとなります。P D C AサイクルのAは学校園を変えるためのアクションです。それは全教職員が評価を共有することから始まります。

また多くの協力を得て出した評価を、子どもたちや家庭、地域の方々と共有することも、アクションを起こすために必要です。学校便りや学校ホームページなどでの公開も、有効な方法となります。

2 学校評価の実施

【学校評価を進める仕組みの有無】

学校評価を進める仕組み	H25 年度	H26 年度	H27 年度	H28 年度	H29 年度	H30 年度	R 1 年度	R2 年度	R3 年度
学校評価を進める 校内委員会等を組織している。	87%	91%	86%	82%	80%	84%	78%	90%	90%
全教職員参加のもとで 学校評価を進めている。	91%	96%	88%	89%	94%	88%	93%	94%	87%

【評価結果に基づく改善方策の検討を行う体制】

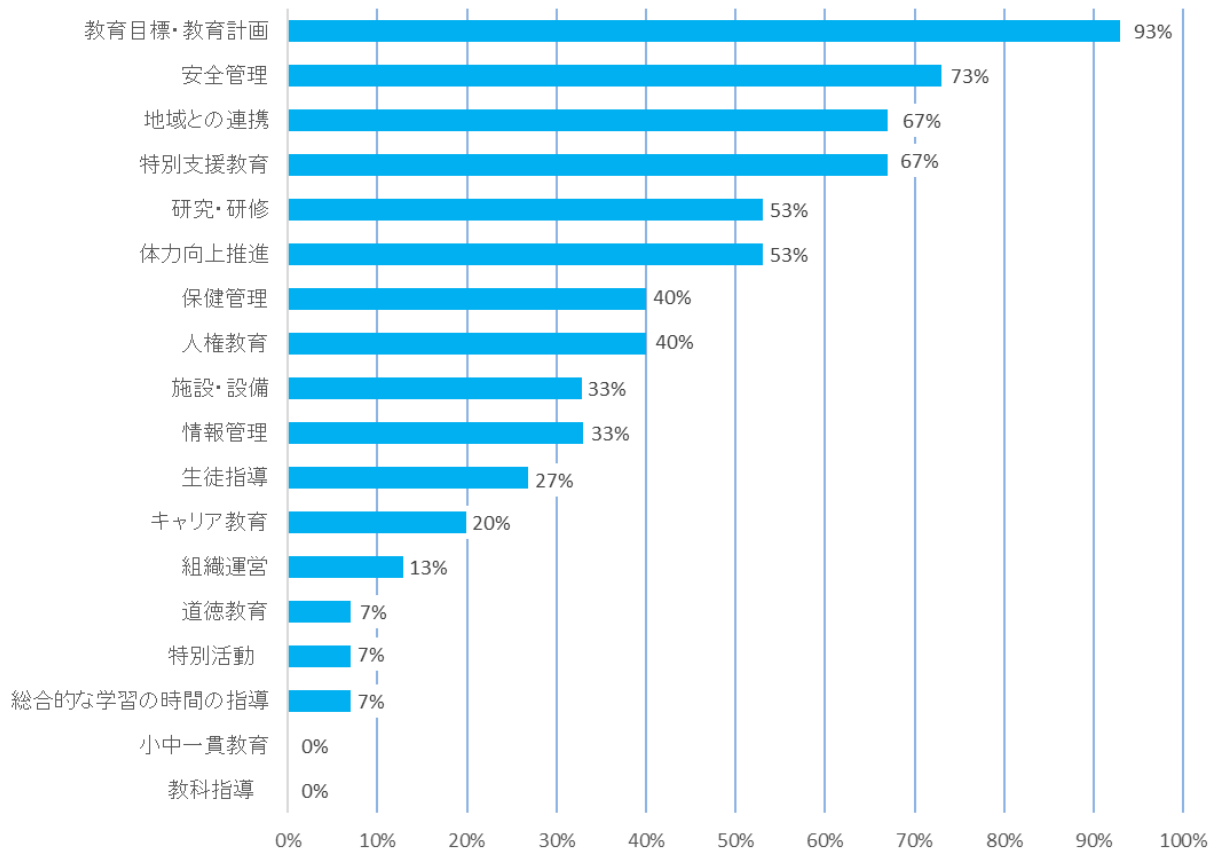
学校評価を進める仕組み	幼稚園	小学校	中高等学校	全体
全教職員参加の体制で行っている。	80%	85%	77%	82%
学校評価関係教職員で行っている。	0%	10%	14%	9%
主に担当者が行っている。	20%	5%	9%	9%

【外部アンケート（児童生徒・保護者等を対象としたアンケート）の実施割合】

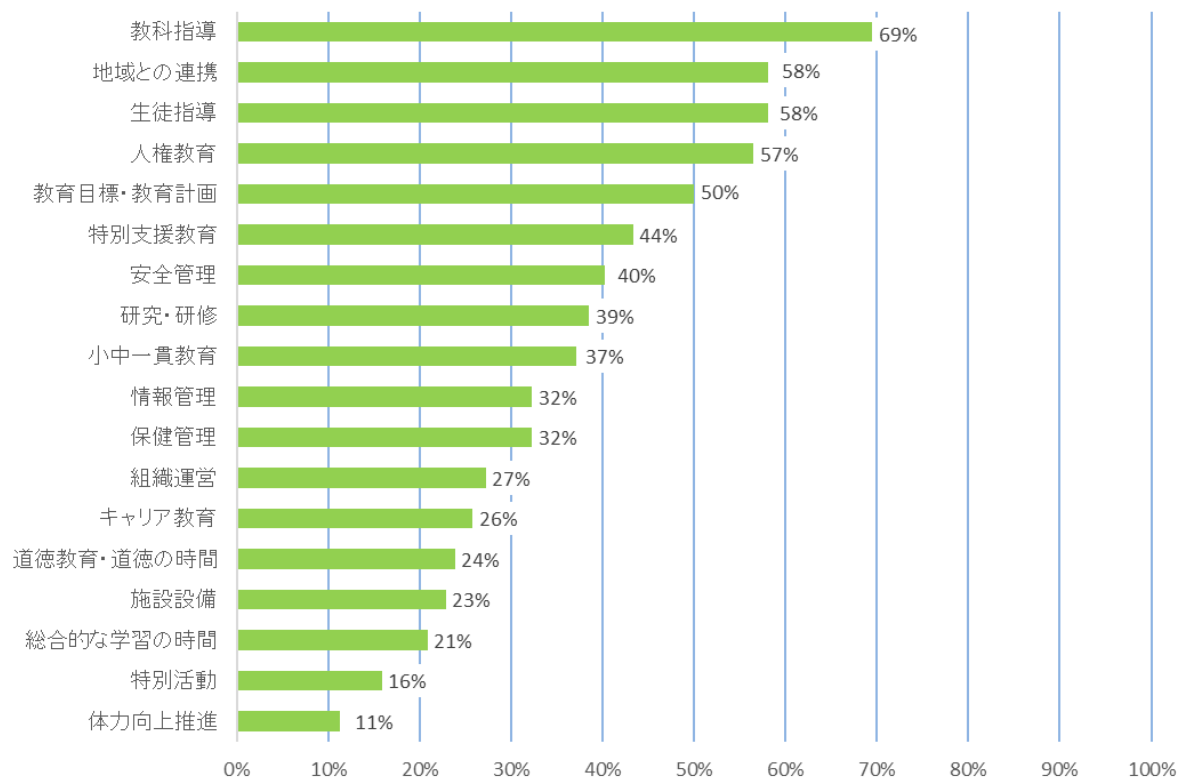
	幼稚園	小学校	中高等学校	全体
年度末に1回実施	60%	23%	18%	29%
年度末以外に1回実施	40%	75%	68%	66%
年2回（1学期末、2学期末）	0%	0%	9%	3%
実施していない	0%	0%	5%	1%
その他（行事ごと等）	0%	3%	0%	1%

【各校が設定した重点的な目標（評価項目）】

幼稚園



小学校・中学校・高等学校



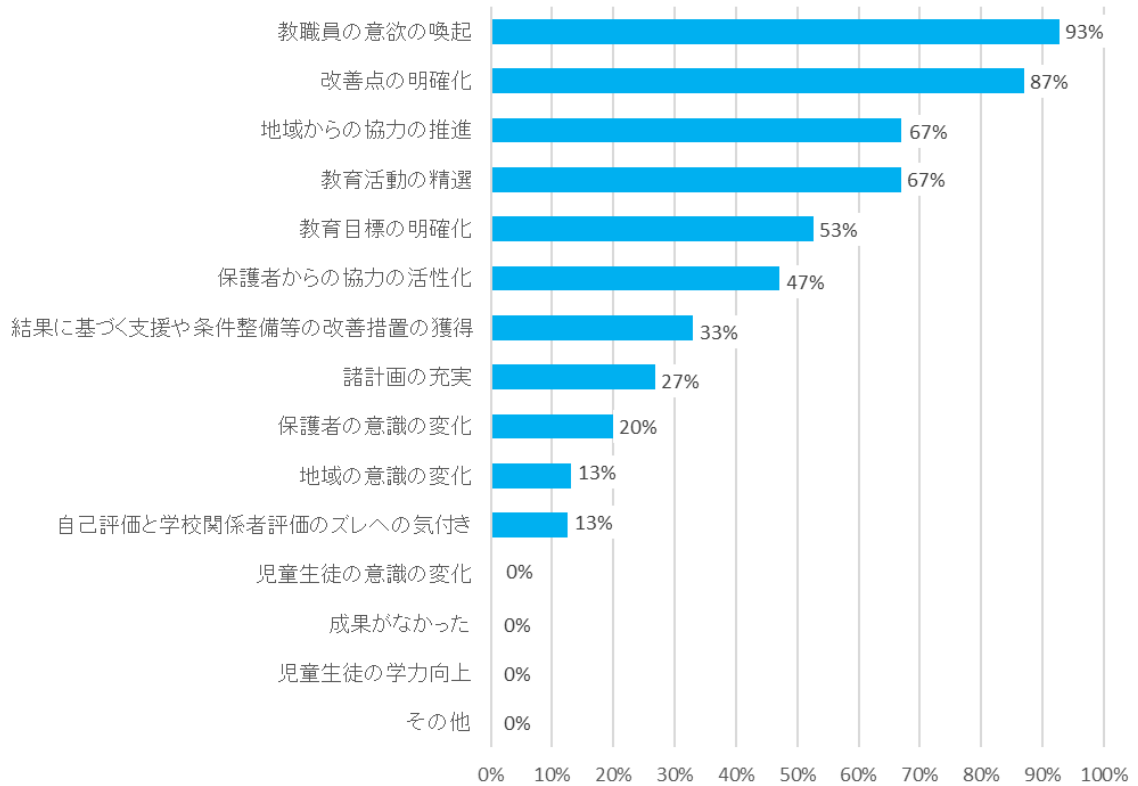
【学校関係者評価の実施について】

	幼稚園	小学校	中高等学校	全体
評価者に学校の自己評価の結果と課題に対する改善策を示している。	67%	80%	59%	71%
学校の教育活動の取組を評価者に説明するとともに、普段の教育活動や学校行事を参観する機会を設けている。	100%	68%	73%	75%
評価はアンケート形式で回答を求めている。	67%	43%	32%	44%
評価者の意見を聞く場を設定し、学校の教職員と直接、意見交換している。	13%	40%	32%	32%

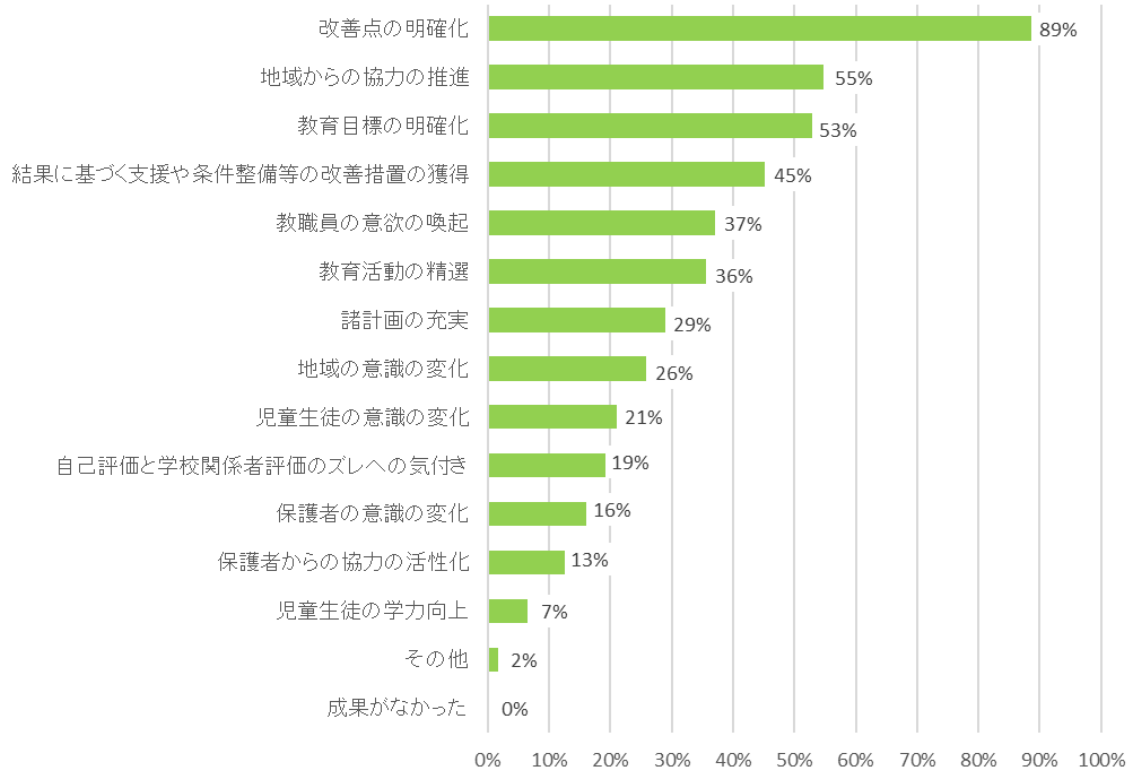
3 学校評価の成果と課題

【学校評価を行ったことで得られた成果】

幼稚園

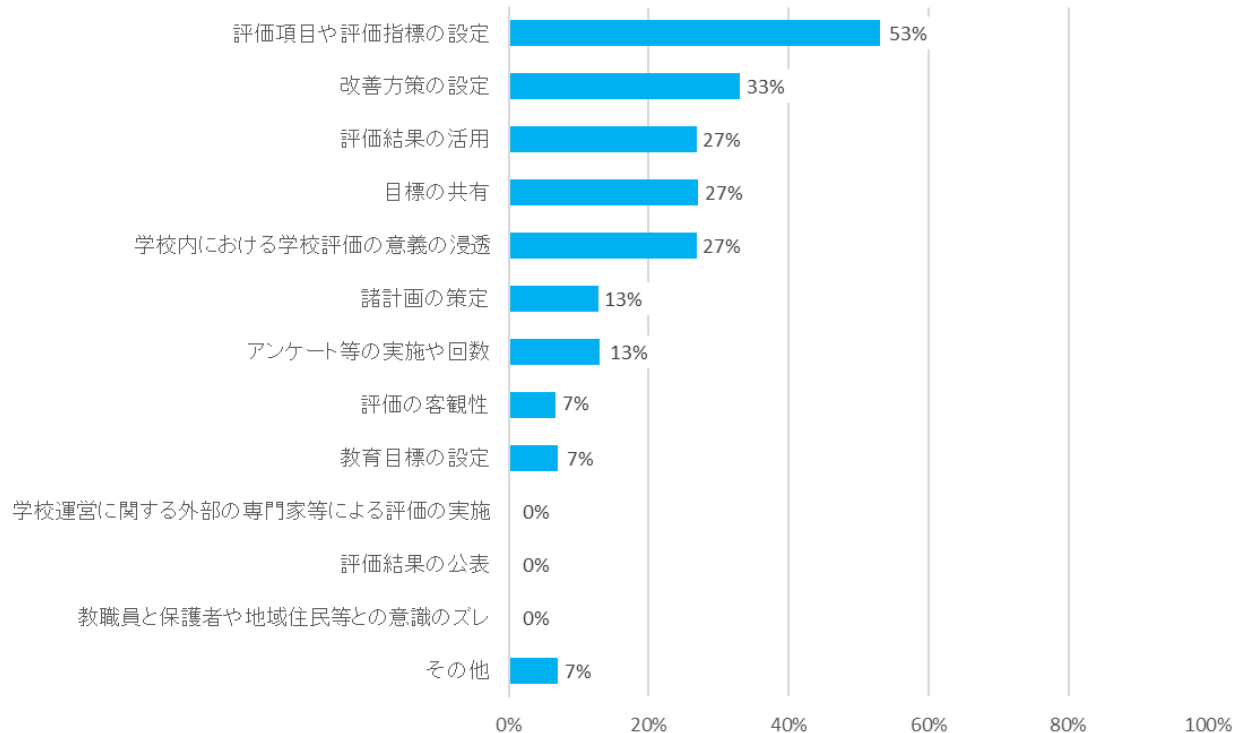


小学校・中学校・高等学校

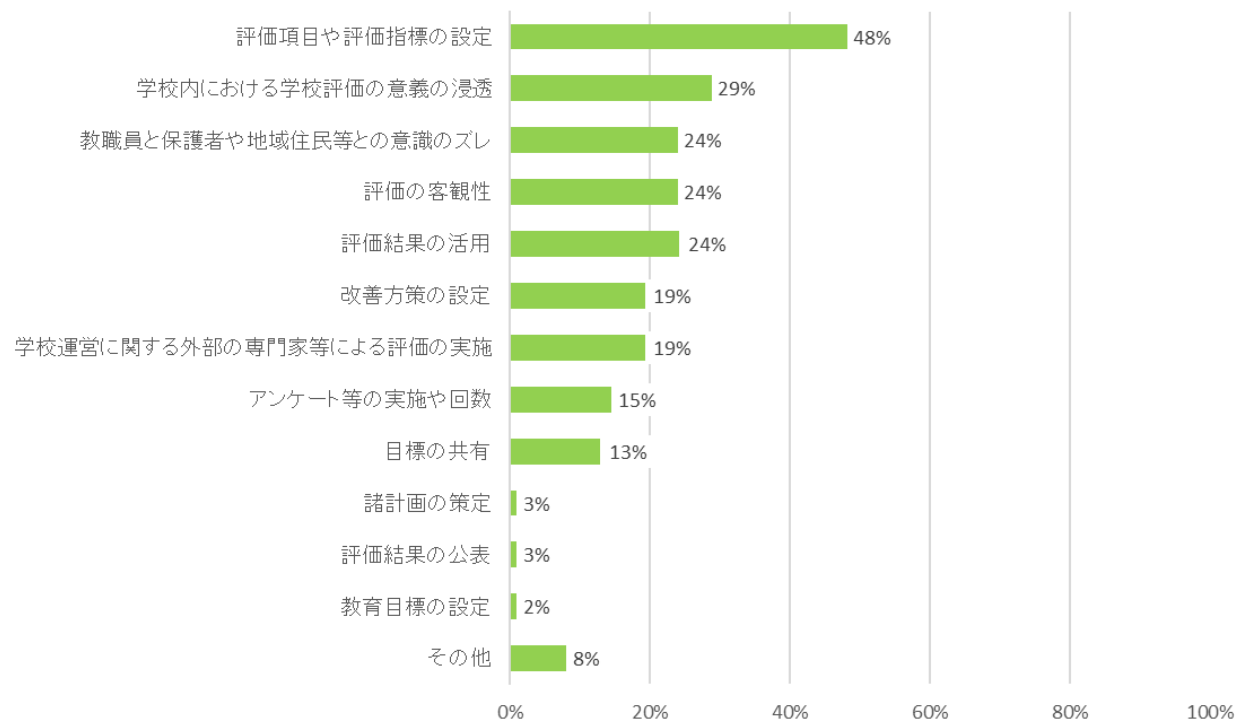


【学校評価を進める上での課題】

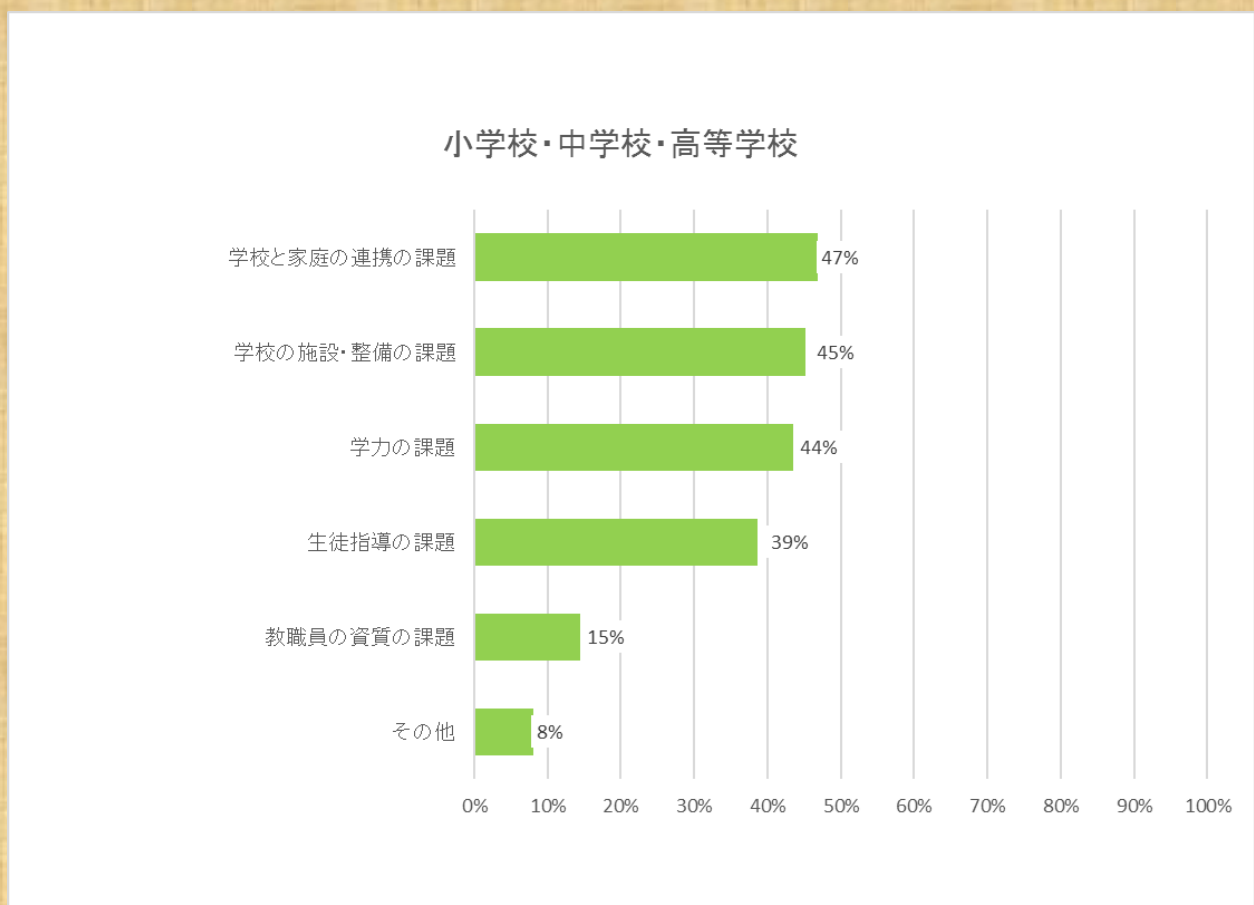
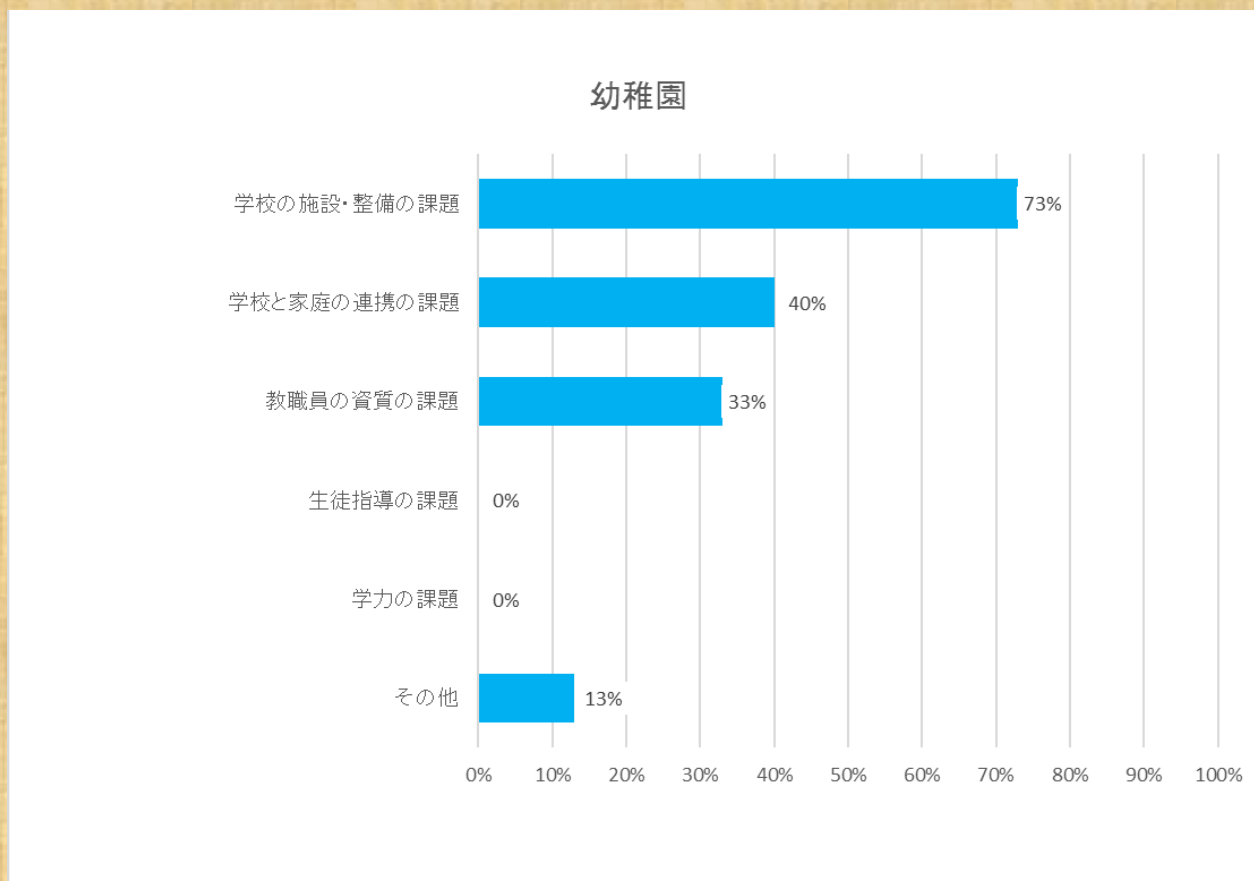
幼稚園



小学校・中学校・高等学校



【学校評価結果から指摘できる、学校園が抱える学校園経営上の課題】



【学校評価結果から指摘できる、学校園が抱える学校園経営上の課題の具体的解決策の例】

〔学校と家庭の連携に関すること〕

- ・ ICT 等を活用した情報の共有と発信。
- ・ HP や学校通信等の効果的活用。
- ・ 各学年で「家庭学習の手引き」を作成し、有効に活用する。
- ・ 家庭との連絡を密にし、教育方針について理解を求めていく。
- ・ PTA や地域とも連携し、各家庭と子育てについての意識啓発を進める。
- ・ 子どものよりよい成長のため、保護者との対応を丁寧に行っていく。また、外部機関とも連携を図り、保護者を支援していく。
- ・ コロナ禍における参観や懇談の在り方の検討。
- ・ コロナ禍により時間的・機会的な制限のため、オンラインを活用した連携を進める。

〔学力に関すること〕

- ・ 読書活動の充実。
- ・ 家庭学習の定着。
- ・ 学力補充の取組。
- ・ 学習規律の再点検。
- ・ タブレット活用による個別最適化。
- ・ タブレット活用による学び合う授業の推進。
- ・ 既存の教育観からの意識改革。
- ・ 授業改善の取組の推進。
- ・ 教職員の授業力を高める研修を実施し、楽しくわかりやすい授業づくりを推進する。
- ・ 地域の支援を得て、放課後の学習支援を行う。
- ・ 学力補充のための有効な教材の選択。
- ・ 学力向上委員会を設置し、学力向上のための方法について検討する。

〔生徒指導に関すること〕

- ・ Q-U（児童生徒の学級での居場所や人間関係についてのアンケート調査）の活用。
- ・ 教職員の共通理解による指導の徹底。
- ・ あいさつ運動など、全校挙げての重点的な指導。
- ・ 関係機関との連携。
- ・ 課題をもつ児童への対応と体制の強化。
- ・ 教育相談活動の充実。
- ・ 家庭・地域との連携による自己有用感の醸成。
- ・ 丁寧かつ迅速に対応できる組織づくり。
- ・ タブレットの使い方など情報モラル教育の充実。
- ・ 交通安全指導を徹底するとともに、地域の方と連携し、児童の登下校の安全を守る。
- ・ 別室登校、相談活動の充実など不登校の児童生徒への対応を学校全体で取り組める体制づくり。
- ・ 学級集団づくりの研修。

〔施設・整備に関すること〕

- ・ 学校施設の環境整備。
- ・ 来年度予算で、教育委員会と相談しながら施設の改善整備を進めていく。
- ・ 児童数急増に対して先を見通した施設の充実を進める。
- ・ 点検作業の日常的な実施を行う。
- ・ 安全確保のために、素早い補修と計画的な修繕に努める。
- ・ 地域や保護者の理解を得て、環境整備を計画的に行えるよう協力体制を整えていく。
- ・ 施設や設備を計画的に管理し、予算を有効に使うとともに、関係機関に協力を求めていく。
- ・ 優先順位を考えた効果的な学校予算の執行。
- ・ 校舎のバリアフリー化。

4 学校評価と学校ビジョン

【学校評価結果をうけて、改善しようとしている学校ビジョンの内容】

- ・校内研修等を活用し、教員一人一人の力量や専門性を高める。
- ・コロナ禍における教育活動の工夫をさらに進める。
- ・計画的でタイムリーな情報発信と、それらの情報を確実に届けるための手段の工夫。
- ・個別最適な学びと協働的な学びについて充実させていくために、ICT を活用しながら授業改善を行っていく。
- ・学校ビジョンや教育目標を学校内で十分に共通理解し、職員全体で実践できるようにする。
- ・児童の様子の変化に気を配り、児童の声に耳を傾け、誰もが安心できる学校づくりを進める。
- ・インクルーシブ教育の理解と実践を進める。
- ・少人数の良さを生かした学習指導を進めるとともに、地域と連携した特色ある教育を進める。
- ・子どもの主体的な学びや自主性、創造力、コミュニケーション能力を高めるために、小中一貫教育9年間の連続した学びを意識して教育を進める。
- ・多様な価値観の生徒を育てるために、多様な生き方の提示をしていく機会をつくり、一人一人が自分の生き方を考える機会をつくる。
- ・society5.0 に向け、教職員のスキルアップのために、各自が自己研鑽を深め、授業研究等により実践力を高めていけるような環境を整えていく。
- ・基礎学力を向上させるために、朝のプリント学習の充実や読書活動を推進する。
- ・不登校生徒に対する取組を進めるとともに、魅力ある学校・学級集団づくりを行う。
- ・指導と評価の一体化を目指すとともに、全体的な学力の向上にむけて、家庭学習の充実に取り組む。
- ・自尊感情を高める教育、ソーシャルスキル教育、地域の方々の連携など様々な角度から方策を考え、教育活動を進める。
- ・地域と連携しての漢検・英検の実施や研究指定の受諾など、明確な指標のある取組の導入。
- ・児童が主体的に学習し、学校生活に喜びを感じ、自尊感情を高めていけるよう教育活動を工夫する。
- ・行事の見直しや、ICT を活用した業務改善を進め、働き方改革を実践する。
- ・G I G A スクール構想に基づく教育環境の変化に対応していくことや、教科担任制の研究などを進めていく。
- ・保護者や地域との連携や、小中の連携をより一層進めていく。
- ・ICT を効果的に活用しながら、授業改善やデジタルリテラシー向上に向けた研修を充実させる。
- ・Q-U 分析を活用し、子どもたちの自己有用感が高まる学級づくりを進める。
- ・生徒の心に寄り添い、個に応じたきめ細やかな見守りと声かけを行う。